

隔離病舎

(熊本病院入院中の歌)

三年二年 古野秀谷

しまらくは隔離病舎の患者なりしかすかに世の味氣なきかな
眞正のチフスなりけり院長の去りし後よりかはと啼く鳥
そよろそよろ風の光れば何處よりにはふ薬ぞ部屋の明るし
開け捨てしごゑに廊下の電燈のほのかに赤し黄昏にけり
西日ふり一羽の雲雀病院のつばに砂浴む土ぼこり黄に
なぐさめの湧かなく木肌匍ひ落つる雫に見入りしづ心なし
泣きたさのこみ上ぐるかも現そ身に死の近かるを鳴かずや鳥よ
いつ我の癒ゆる事ぞも太陽は今日も西日となりてい照るに
母よ子を迎ひに來よと電報を打たせけるかも喜びに堪へず
子燕巢立ちせし日を薄暗き部屋に村醫者呼びにけるかも

(退院の日)

—四、六—